

一人一人の

フッフル

今年は丑年。十二支の中で3年後にやってくる辰（龍）だけが架空の生き物というのも妙なものが、伝説上でも竜は人間を加護するものとされ、昇り竜になぞらえてか開運の象徴にもなっているようで、いずれにしろ古来より人間にとって親しみのある存在ではあったようだ。

映画『ネバーエンディング・ストーリー』では、幸福を追求する手だてとして、「幸いの竜フッフル」（日本語版では「ファルコン」）が登場する。竜には、何かしら、人間の希望のようなものが、象徴されているのかもしれない。

実際に竜に親しむとすれば、日光東照宮の「鳴き竜」がなんといっても有名なところ。天井に描かれた竜の絵の下で拍子木を打つと、床と天井の音の反響で竜が鳴いているように聞こえるというものだ。単なるギミック（からくり）にすぎないが、人として竜に親しむには面白い趣向だと思う。

その日光の鳴き竜と同趣のものも秋田にもある。由利本荘市藤崎の正乗寺本堂の鳴き竜がそれ。正乗寺は貞観8年（866）の開基、現本堂の建立も寛政12年（1800）という古刹だ。その本堂の天井に、幅4.3m、長さ14.4mの竜の絵が豪胆なタッチで描かれている。描いたのは本荘藩お抱え絵師の増田松洞。嘉永4年（1851）に『師父母同縁菩提』として寺に寄付されたものだから、鳴き声の原理は日光と同じだが、天井と床が完全に平行に造られていないとこの現象は起こらないのだそうで、当時の建築技術の高さも見逃せないところ。

ところで、日光の鳴き竜は、案内の人が拍子木を打って鳴き声を聞かせてくれる。見学者が手を打つことはできない。写真撮影も禁止。してみると、正乗寺のほうは、見学者がみずから打った手に竜が鳴いて応えてくれるわけだし、記念に写真を撮って帰ることもできる。

日光も結構だが、お参りの一人一人の「相手をしてくれる」秋田の鳴き竜にも、ちょっと親しみがわこうというものではないだろうか。

金峰山正乗寺は、由利高原鉄道薬師堂駅から南西に約1.2km。歩いて25分ほど。鳴き竜の見学はお寺の方に一声かけてから。本堂で法事が営まれているときなどは遠慮したい。 正乗寺 0184-22-0914

